



## 天は自ら助くる者を助く

国民の質がその国の質を表すとは、よくいわれることですが、最近の日本人の姿を見ると、政治家はテレビ世論に媚び、事程左様に内閣は朝令暮改を繰り返す、金を操るべき経済人は金に操られ、教育者は常識を失い、市井の人々は親の亡骸さえ利得の材に使いと、それが一例であるとしても、そこには時代精神の典型が表れていて、人も国も壊れはじめているのは、どうも認めざるを得ない事実のように思います。

「建学の精神」の授業でも触れることがあるヒラリー・クリントンの母校ウェルズリー・カレッジの建学の理念は、本学とほぼ同様に、“non ministrari sed ministrare”（人に奉仕されるのではなく、自らが奉仕せよ）でしたが、現代の日本人は、自らが奉仕するのではなく、いつも人が奉仕してくれるものと思い込んでいる、全ては人が与えてくれる、反対に与えてくれないと、今度は人に不満を投げつける、人に頼る、国に頼る、事によると外国に頼る、どうしてこんなにうらぶれた国民になってしまったのでしょうか。

古来、日本人ほど教育と倫理を重んじる民族はないといってもよく、日本を訪れた最初の西洋の知識人であったザビエルは、日本人の特性について故国にこう報告しています。「日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだで見つけられないでしょう。驚くほど名誉心の強い人びとで、大部分の人びとは貧しいのですが、武士も、そうでない人びとも、貧しいことを不名誉とは思っておりません。名誉は富よりもずっと大切なものとされているのです」。殊更日本人をほめそやす必要もなければ、けなす必要もない、後続の宣教師たちのために必要な情報を提供するという彼の意図に、ありのままの事実の記載はあっても、嘘も誇張もないでしょう。それにも拘わらず、戦争に一度負けたくらいで、折角私たちの祖先がつかってきた良質な規範や価値まで手放そうとして。

いつの時代も内憂外患はつきものですが、明治日本の抱えた社会条件・国際環境は、今よりはるかに厳しく危ういものがありました。しかし、明治を創った人々は、男も女もみな質実でした。『坂の上の雲』の司馬遼太郎さん風にいえば、開化期をむかえようとしていたまことに小さな国が、それでも世界から矚目され、アジアから期待されたのは、“The Great”（大帝）と呼ばれた明治天皇の偉さも、政治家や将軍たちの立派さもありましたが、しかしその本質は、国民一人ひとりが夢と誇りをもって自分自身に与えられた務めを真摯に果たそうとしたからに他なりません。明治13年生まれ、松本生太先生も、そうした日本人の一人でした。

その明治の青年たちがこぞって愛読した本が、サミュエル・スマイルズというイギリス人が書いた“Self-Help”、日本では『自助論』と訳される本です。幾多の警句がちりばめられたこの本は、次のような書き出しではじまっています。「天は自ら助くる者を助く。自助

の精神は、人間が真の成長を遂げるための<sup>いしずえ</sup>礎である。自助の精神が多くの人々の生活に根づくなら、それは活力にあふれた強い国家を築く原動力ともなるだろう。外部からの援助は人間を弱くする。自分で自分を助けようとする精神こそ、その人間をいつまでも励まし元気づける」。

この一文にも<sup>み</sup>看て取ることが出来るように、この本に一貫して流れているテーマは、忍耐と努力と希望の精神です。スマイルズは、こうも言っています。「いつの時代にも人は、幸福や繁栄が自分の行動によって得られるものとは考えず、制度の力によるものだと信じたがる。だが、われわれ一人ひとりがよりすぐれた生活態度を身につけない限り、どんな正しい法律を制定したところで人間の変革などできはしないだろう。われわれ一人ひとりが勤勉に働き、活力と正直な心を失わない限り、社会は進歩する。政治の力だけで国民を救えるというのは実に危険な幻想なのだが、このような考えはいつの時代にもはびこりやすい」。

確かに、現代は、コンビニエントリーに価値を手にする時代、忍耐は苦痛に感じられ、目先の成果を求める時代、努力は<sup>むな</sup>空しく響き、先行き不安が語られる時代、希望は見出し難く、いずれも、現代人がもつことを苦手とする精神なのかも知れません。しかし、壊れることを望む人はいないはず、この国と国民が復元するには、皆が自助の態度を身につけなければならないのであり、結局は自助の精神を育むことこそ、変わらない教育の使命なのだと思います。最後まであきらめず、未来に期待をかけるのが教育者というものです。まして、歴史的に見ても、日本は、聖徳太子の時代から、開国と鎖国、受容と消化、流動と復元を、時に意識的に、時に無意識に繰り返しながら成長してきた国柄であるのですから。

※『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』 河野純徳 訳 平凡社

※※スマイルズ著『自助論』 竹内均 訳 三笠書房

[>前のページへ戻る](#)